一般口演

日本における初期の耳科書四種

田中助一

我国で現在のような耳鼻咽喉科の専門診療が始まったのは、明治二十三年（一八九〇）二月十二日に、陸軍軍医賀古鶴所が日本赤十字社病院で行ったのである。

しかしその前に四種の耳科書が刊行されていることが、久保猪之吉編の『日本耳鼻咽喉科学全書』の第一巻の一（昭和八年四月刊）の年表に記してある。

第一は明治九年二月二日刊柏原学而著『耳科提綱』（和本二冊）

第二は明治十七年四月刊吉田顕三著『耳科約説』

第三は明治十九年五月十五日刊長町耕平著『耳科新説』

第四は明治二十二年十二月刊飯高芳康著『耳科攬要』である。

右四冊のうち、『耳科提綱』は時々古書店に出たので、早く入手することが出来たが、あとの三冊はどうしても入手出来なかった。そこで先年日本医事新報の紙面を借りて、広く問い合せたのであるが、応答は全然なかった。

数年前日本医事新報に吉田顕三のことについて書かれた方があったので、『耳科約説』のことをたずねたところ、広島大学の医学資料館に所蔵されていることを教えられたので、六十一年四月同地で開催された日本医史学会に出席したついでに見ることが出来た。この本には広島県医師会寄贈のスタンプが捺してあった。

他の二冊については、昭和五十八年七月二十一日刊行の『日本耳鼻咽喉科史』（日本耳鼻咽喉科学会編）に写真入りで紹介されているので、委員の木村繁氏に問い合せたところ、委員の横川弘蔵氏が国立国会図書館で見つけられたとの返事があり、コピーを送って下さった。私は昭和二十四年から五年にかけて東京に居て、日本赤十字社病院・東京大学耳鼻咽喉科や慈恵会医科大学耳鼻咽喉科には調べに行ったが、国会図書館には行っていなかった。

柏原学而は香川県出身で、緒方洪庵に蘭学を学び、のちに徳川慶喜の侍医になり、静岡に移住し、廃藩後同地で開

業、明治四十三年十一月五日七十六歳で没した。（土屋重朗著「静岡県の医史と医家伝」）『耳科提綱』は米医グロッスの外科書の蘭訳本を重訳したものである。

吉田顕三は広島県山県郡今吉田の生れで、明治五年英国に留学し、十一年帰朝して海軍軍医少監に任ぜられ、大監に進んだ。十四年大阪医学校長兼病院長となり、大正十三年三月一日七十七歳で没した。（阪田泰正著『広島県の医師群像』）この本は欧米の諸書を参照したものである。

長町耕平は香川県綾歌郡富熊村に生れ、幼時より神童と言われ、はじめ蘭学を学び、明治四年東京に出て独逸語を学び、五年大学東校に入り、十四年七月に東京大学を卒業、新潟県三条公立病院長を経て、十六年に県立山梨病院長となり、在職中に『耳科新説』を訳述し、二十四年四月香川県立高松病院長となった。三十一年に辞して市内に拙誠堂医院を開業し、大正八年六月二十三日に六十七歳で没した。（讃岐人名辞書）この本は諸書を参照したものである。

飯高芳康は『東京帝国大学医学部卒業生氏名録』によると、明治十七年の別課卒業生であるが、その他の記載は何もなく、大正八年以前に死亡していることだけわかる。『耳科攬要』の原書は、初版には独逸ア・サルロン著となっているが、二十三年六月に刊行された増訂第二版では英人になっており、ポリツエルの耳科書により増補したものになっている。

以上日本における耳鼻咽喉科の前駆期に刊行された四つの耳科書につき、東京帝国大学教授岡田和一郎博士は、「単に飜訳家が欧米の出版物を飜訳したるに過ぎず、専門家としての実地研究を基礎としたるものに非ず、故に欧米に於て既に専門書の存在したる事を示すにすぎずして、広く一般医家の間に行はるるに至らざりき」と評している。

（『日本耳鼻咽喉科学全書』第一巻の一）

（萩市・開業）